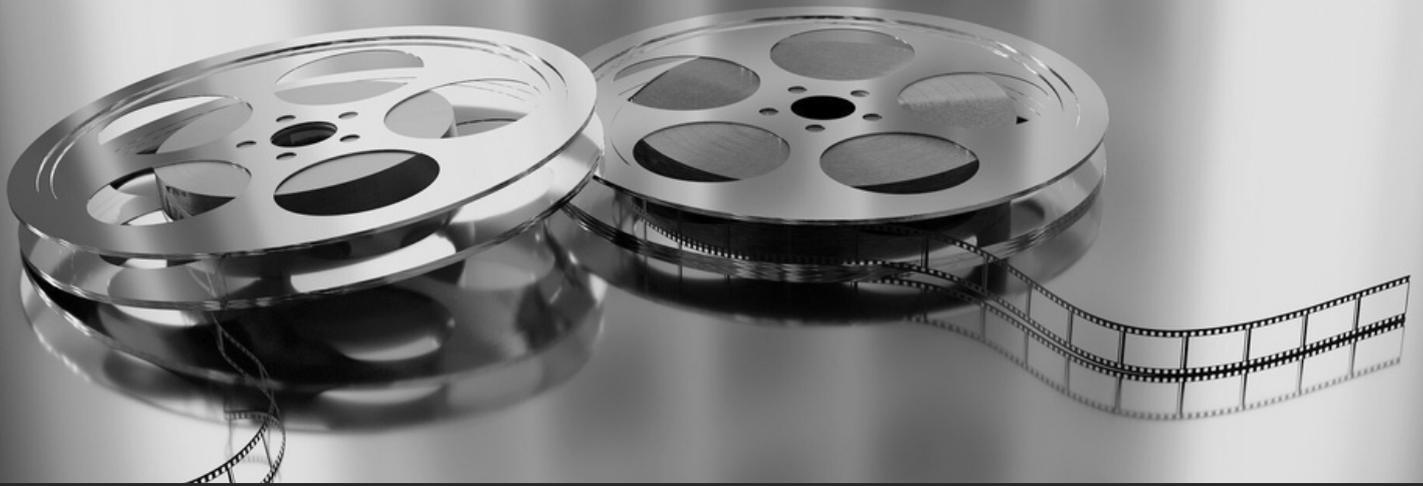


シネマ通信

第12号 (2024年3月29日)



オッペンハイマー

第12回鑑賞作品

監督・脚本：クリストファー・ノーラン

「メメント」「ダンケルク」「TENETテネット」他

原作：カイ・バード，マーティン・J・シャーウィン

「オッペンハイマー」('06年、ピューリッツアー賞受賞)

出演：キリアン・マーフィ (オッペンハイマー) エミリー・ブラント (妻、生物学者) ディラン・アーノルド (弟、素粒子物理学者) ロバート・ダウニー・Jr (水爆実験推進者)

第二次世界大戦下、米国で極秘に推進された「マンハッタン計画」。その指揮者に任命された天才科学者オッペンハイマーは、ナチに対抗する使命感で目標達成に猛進。世界初となる原子爆弾の開発に成功する。しかし、その実験結果の惨状を知った日から、彼の人間としての苦悩が始まる…

第96回アカデミー賞で、作品賞、監督賞、主演男優賞、助演男優賞など、最多の7部門で受賞。

もう、後戻りはできない！核の恐怖の下で生きざるを得ない私たち人類に、多くの問題を突きつけた作品です。

原爆の父として知られる
オッペンハイマー
その栄光と苦悩の日々を
彼の視点で追体験する



About Them

「オッペンハイマー」の監督、クリストファー・ノーランは、1970年ロンドンに生まれる。子どもの頃から8ミリで撮影を始め、1989年には短編「TARANTELLA」が公共放映サービスで放映される。大学では英文学を専攻する傍ら、16ミリ映画を制作。初の長編映画「フォロイング」が各国映画祭で高評価を獲得。続く「メモメント」でインディペンダント・スピリッツ・アワードの監督賞と脚本賞を受賞。アメコミヒーローに新たな命を吹き込んだバットマン3部作では、重厚でリアリスティックな映像世界を構築し興業面でも大成功を収める。「インセプション」「インターステラー」「ダンケルク」「TENETテネット」と、順風満帆の監督生活。大学の同級生で映画製作者の夫人とは、アカデミー授賞式でも仲睦まじいところを見せていました。今回主演男優賞を獲得したキリアン・マーフィーは、監督お気に入り俳優の一人。彼の謎めいたブルーアイが、ここぞというシーンで観客の心に迫ります。



About Something

超多忙で映画を1本も観られなかった2月も終わり、ウズウズしているところに友人から「落下の解剖学」面白いわよの情報。翌日、さっそく観に行きました。「ヴィクトリア」で日本でも知られるジュスティヌ・トリエ監督・脚本のフランス映画です。人里離れた山荘に住む、夫婦とその一人息子。息子は事故で視覚障害がある。妻は作家として成功し、作家志望で元教師の夫が家事の大半を担っている。ある冬の日、息子が愛犬と散歩に出た間に、夫が3階の窓から？落下して死亡。妻に殺人容疑がかかる。裁判シーンで公開される、夫が密かにとった夫婦喧嘩の録音テープが凄い。家事に追われ作品に没頭できない！君に人生を奪われたと叫ぶ夫。40歳にもなって何も書けないのは自分のせい！あなたは被害者じゃない！と応じる妻。真に迫る二人のやりとりに制作者のパワーを感じていたら、今回のアカデミーでは見事脚本賞を獲得。二人の過去が暴かれ裁判は紛糾するが、自殺の可能性も認められ妻は無罪となる。はたして、自殺か？他殺か？真相は不明のままのエンディングだが、不思議と欲求不満は感じない。緊迫の展開の後に、クールな後味を残す秀作といえるでしょう。ちなみに監督自身も、映画製作者のパートナーとの間に二児をもつ母親。実体験が、脚本に厚みを与えているのかもしれませんが。

共働きが普通になった昨今ですが、クリエイター夫婦というのは、時に難しいのかも…。三岸好太郎・節子の画家夫妻。夫が31歳で亡くなったとき妻は「これで私が生きられる」と思ったそうです。「一升の枀に2升の水は入らなかった」と言って離婚した俵孝太郎と萌子。高橋和巳は妻のたか子が執筆するのを嫌い「君の脳波が僕の神経に障る」と責めたそうです。一方、「婆さんになったお前が見られなくて残念だ」と言って旅立った藤田宣永。さまざまな愛の形を綴った小池真理子とは、さぞかし、幸せな直木賞作家夫婦だったのでしょうか。（以上、筆者の遠い記憶によるもので出典も明らかではありませんが、内容は間違っていないと思います）

同性婚も、別姓婚も認められつつある昨今。結婚制度が多様化するの良しとして、SINGLEの方がSIMPLEに人生が楽しめると考える若者が増えていくのは、ちょっと気がかり。デジタルが脳細胞にまで浸潤してしまったら、婚姻などという七面倒くさい制度は、自然消滅してしまうのでしょうか？